

高橋文太郎の真実と民族学博物館



右上) 時代を証言する写真 160 枚が掲載されている。縦画 1500 円
左上) 民族学博物館本館 現在の西東京市東町 1 丁目かえて通り沿い (持嘉一郎氏所蔵・神奈川大学日本常民文化研究所保管)



右・敷地内から見た民族学研究所 (持嘉一郎氏所蔵・神奈川大学日本常民文化研究所保管)



上) 展示室内 (持嘉一郎氏所蔵・神奈川大学日本常民文化研究所保管)
下) 左に高倉、右奥にアイヌ民家。高倉は現在小金井市の江戸東京たてもの園内に移築されている。(西東京市中央図書館所蔵)

「民族学博物館」が知っていますか？

かつて保谷にあったこと

特集

地元の埋もれた歴史を次代へ引き継ぐために

下保谷のまちに、今は跡形もなければ、ほんの昔前に存在した日本初の野外展示を含む「民族学博物館」。この博物館設立の中心となった地元の大地主、高橋文太郎と実業家の渋沢敏三のこと。地元でも知る人少く、資料もないに等しい。こんな貴重な地域史が埋没していくことに危機感を感じた下保谷の人々が「高橋文太郎の軌跡を学ぶ会」を立ち上げたのは平成 19 年 4 月のことだった。

校正者の萩原恵子さん、元校長で民俗学に詳しい高田賢さん(会代表)が中心となり、地元を良く知る人たちが「今、記録しておかなければ、埋もれた歴史は残らない」と当初から本をつくる意図で、図書館や大学、古本屋へ資料集めに走り、地元の古老に取材して当時のことを訊いた。写真集めが大変だったが、緑ある史料館等も協力的、地元の関係者も、ツテを熱心になどって探す会員に根負けし、死蔵していた写真をひっぱりだしてくれた。

こうしてほぼ 1 年で「高橋文太郎の真実と民族学博物館―埋もれた国立民族学博物館前史―」の発

野外博物館の先駆け、民族学博物館の物語…なぜ保谷にできたのか

日本近代資本主義の父、渋沢栄一の孫にあたる渋沢敏三は日銀総裁、大蔵大臣も歴任した実業家だが、一方で民族学や民俗学の学問に多大な貢献をした研究者でもあった。社会人になった頃、自邸内の物置屋根裏に有志たちとアチックミュージアム(屋根裏の博物館)を結成し、郷土玩具や民具、漁具、農具の収集、研究を行っていた。

このアチックミュージアムの一員として参加していたのが、当時明治大学卒業直前だった高橋文太郎である。在学中、山岳部で活躍していたこともあり、山の民俗学に傾倒していた。父、高橋源太郎は武蔵野鉄道(のちの西武鉄道池袋線)創始者の一人で、三多摩一といわれるほどの資産家であり、文太郎も卒



昭和 35 年頃の園内全景イラスト・久世アキ子氏



博物館があった地は現在清水建設の社宅とマンションに。「武蔵野の民家」の古材を利用して、左手の集会所兼茶室が造られた。

行が実現したのは、その内容の豊富さ、深さからしても驚異的だ。「悠長な気持ちで始めた学芸会ではなかったため、常に何が必要かを考えていました。地元ですから、時間とともに網をたぐるように各会員の元にいろんな情報が集まってきました。ですからほぼ 1 年という短時間で本を作れたのです。1 年間に講演会開催も資料集めも本製作もやり、会員それぞれ全くキツかった。達成感はありませんが」と萩原さん。高田さんは「やれることはすべてやりきり、これ以上はもう資料は出てこないでしょう」と話す。会員同士で出版費用を出し合い、自分たちの町の埋もれた歴史を後世につなぐことに、いかに心血を注いだか、その心意気が伝わってくる。



高橋文太郎(『渋沢敏三著作集第 3 巻』(平凡社)より転載)



「高橋文太郎の軌跡を学ぶ会」の右から高田賢さん、萩原恵子さん、高橋孝さん(高田さん宅にて)

いつも勉強会を開いていたという、会員の高橋孝さん宅の蔵に案内してもらった。「昔のことを勉強するのに対応しい場所ですよ」と萩原さんが言う通り、明治につくられた蔵には懐かしい雰囲気漂っていた。

業後武蔵野鉄道の役員に就いていた(数年後退社)。

渋沢敏三には大正 13 年、北欧旅行の折立ち寄ったスウェーデンのスカンセン博物館のような野外博物館を造りたいという壮大な夢があった。建物だけでなく、民衆の生活にかかわる道具もまるごと収集保存し、調査研究、展示企画する構想。そのキーマンとなったのが高橋文太郎と、博物館の全体構想を描いた今和次郎であった。

アチックミュージアムで集めた資料は昭和 11 年までに 1 万点近くになり、渋沢敏三はこれらを公開できる日本民族博物館の設立を皇紀二千六百年記念事業として立案。しかし当時の政府の財政状況は悪かったようで、現実には予算が通ら

なかった。野外民族博物館建設は、文太郎がまず、下保谷の所有地約 1 万坪を寄付し、渋沢敏三が資料と残りの土地を提供するという自腹仕事で実現に向かっていった。

昭和 12 年にまず、東武鉄道飯事務所と清水組建築詰め所をゆずり受け、事務所と研究所を建設。翌年には野外展示物として、高橋家が所有していた古民家を移築。今和次郎によって絵馬堂も新築された。そして鉄道省工事事務所をゆずり受け、360 坪の博物館展示棟ができあがった。アチックミュージアムの収蔵民具 2 万点余もすべて移管された。

昭和 14 年 5 月開館。バラックとはいえず、野外施設、研究所、展示棟を持つ、日本初のオープンフィールドミュージアム「日本民族学会付属民族学博物館」の誕生だった。ところが翌年 1 月、高橋文太郎は突然、土地の寄付を撤回し、研究員もやめてしまう。「保谷の地に国立の博物館を」という熱い思いはなぜ失せたのか。翼賛的な体制になったためなど、様々な要因が複合的に作用した結果、離れていったと伝えられている。このため敷地は渋沢分の約 3 千余坪となった。戦中、博物館は一時中断したものの



昭和2年9月完成した高橋家 屋敷西側に桜並木、3つの築山、門は6つもあつたとか。(高橋孝氏所蔵)



1935年頃、洛月島の金支鏡氏をアチックに迎えて。前列右が渋沢敬三、後列右から2番目が高橋文太郎(祐嘉一郎氏所蔵・神奈川大学日本常民文化研究所保管)

特集

の、戦後渋沢敬三は精力的に動き、アイヌの民家をつくり、奄美大島から高倉を移築した。しかし、バラックの研究、展示棟は老朽甚だし、昭和37年に閉館。民具などの

高橋文太郎の功績と高橋家

貴重な標本約4万7千点は国に寄贈され、文部省史料館を経て、大阪府吹田市にある現在の国立民族学博物館に引き継がれている。

高橋文太郎は昭和23年に45歳で病没し、活躍期間が短かったこともあり、長い間忘れ去られた民俗学者だった。しかし30歳代前半に集中的に調査旅行をし、多くの著書、論文を発表した。昭和10年に刊行した「武蔵保谷村郷土資料」は当時の農村生活を知る上で地元に必要な貢献をしている。郷土への熱しみが感じられるこの原本は西東京市中央図書館に保管されている。

また、秋田県のマタギの研究は当時先進的で、山の人々の暮らしをこつこつと研究した人でもあった。「武蔵野に萌える若葉の櫛」のような人と渋沢敬三が書いている通り、学者のような功名心もなく、淡々と好きな仕事をやる。大変な文才があり、常に謙虚で真摯な人であったという。

文太郎が育った高橋家は藍玉などの取引、金融、不動産業で巨万の

富を得た屈指の資産家であると同時に村の発展のために多大な貢献もした。武蔵野鉄道や駅前商店街の整備、厚生、医療面の配慮から青年指導まで。

昭和2年に2年半をかけ完成した家屋は贅を尽くしたもので、保谷御殿と呼ばれた。文太郎亡き後は相続税で物納後、西武鉄道に買われ、北京料理「保谷武蔵野」として使われていたが、平成14年営業打ち切り。

解体される最後の日を見た高橋孝さんは「何でこんな素晴らしい建物が壊されるのか、わびしかったですわね」そんな思いから業者に頼み鬼瓦だけ貰ってきたという。自宅の玄関脇に並べ、往時を偲ぶ唯一のよすがになった。保谷駅前のこの地には現在ファミリーストラン2軒が建っている。

時代を先取りし、理想の博物館

をつくり、夢を紡いだ男たち。時代の波に翻弄され、理想の実現には至らなかったけれど、保谷の地に40年にわたり、彼らの燃える思いや実績が確実に存在したこと。またその歴史を世に出した会のみなさんの卓越した市民力に感動する。会では「民族学博物館発祥の地」の銘板をつくり、市に寄贈。博物館のあった清水建設住宅入口付近に11月8日に設置する。

東京文化財ウィーク2009・西東京市企画事業「民族学博物館と渋沢敬三・高橋文太郎」

- 写真展 11月7日(土)～15日(日)10時～17時保谷駅前公民館
- 講演会 11月8日(日)13時～16時「渋沢敬三と民族学博物館」近藤雅樹氏(国立民族学博物館教授)
- 「高橋文太郎著『武蔵保谷村郷土資料』の意義」石井正巳氏(東京学芸大学教授)西東京市保谷駅前公民館
- 農具展示と実演 11月14日10時～15時 会場 高橋家(下保谷福祉会館東隣)
- (問)042(478)3820 高田、講演会申込は ☎042(438)4079 社会教育課へ